



ジェントルハート通信

No. 38 冬号
発行日 2013.2.25

『みんなの本当の優しさ』

理事 玉越直人

発行
NPO法人
ジェントルハートプロジェクト

事務局
〒210-0843
川崎市川崎区小田栄1-8-3 青山
Tel & Fax
045-845-3620(小森)
E-mail admin@gentle-h.net
URL http://www.gentle-h.net

会員登録及びカンパは随時受付中
正会員 1口 2,000円
賛助会員 1口 1,000円
郵便振替
口座番号:00200-8- 111295
口座名義:ジェントルハートプロジェクト
振込用紙に会員の種別を明記下さい



目次:

巻頭コラム	P 1
『校長研修』の講演より	P 2-3
桜宮高校指導死がもたらしたものの	P 4
校長日記	P 5
活動の報告と今後の予定	P 6-7
橋がかかる	P 8

ジェントルハート通信第38号
定価100円(会員は無料)

『銀河鉄道の旅』(新潮文庫)は、私が大好きな宮沢賢治の傑作です。

少年時代に読み、主人公ジョバンニと親友カムパネルラとの「夢の世界での旅」にいたく感動。終盤では、現実世界でカムパネルラが、ジョバンニをいじめていた級友が河に落ちたのを救い、逆に水死してしまうくだりには、悔しさも混ざり、涙が止まりませんでした。

幼な心に「親友」というものの美しい原風景が深く刻まれた遠い記憶です。

そして成人に近づく頃、本を読み返すと、貧しく孤独な少年ジョバンニの負う厳しい環境、苦悩、心の闇がひしひしと伝わってきて、賢治の内包する深く重い主題「人生の苦衷」に心が震えました。書物というものの力に圧倒され、『よだかの星』など賢治作品に引きずりこまれた瞬間でもありました。

忘れられないのが、「ジョバンニはなんだかわけもわからずに、にわかにとり鳥捕り(鳥を捕まえる仕事の人)が気の毒でたまらなくなりました。<中略>もうその見ず知らずの鳥捕りのために、ジョバンニの持っているものでも食べるものでもなんでもやってしまいたい、もうこの人のほんとうの幸になるなら、自分があの光る天の川の河原に立って百年つづけて立って鳥をとってやってもいいというような気がして、どうしてももう黙っていられなくなりました」という一節。

「人間が本来持つ根源的な心の優しさ」が私の心を芯から温かくしてくれたのです。

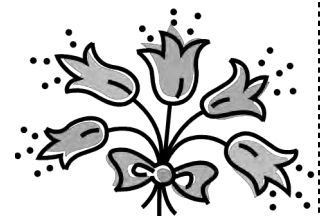
あれから幾星霜、私は36年近く出版の仕事をやってきましたが、人間も動物も自然も社会も、出版のテーマはすべて「いのち」につながり、それを支える「優しい心」を本に込めて一人一人の読者の方々にお伝えできればと今も考えています。

当法人で共に活動する小森美登里理事の一人娘、香澄さんが15歳で自殺する直前に遺したメッセージ「優しい心が一番大切だよ。その心を持っていないあの子どもたちのほうがかわいそうなんだ」が、当法人の名称を生み、香澄さんが抱いた「優しい心」は私たちの胸のなかにずっと生き続けています。

小森理事は著書『いじめの中で生きるあなたへ』(WAVE出版刊)の中で述べています。

「地球というジグソーパズルのピースは、一つ一つみんな色も形も違う友だちであり、たった一つでも足りなければ完成せず、ピースのみんなに、心からの喜びは生まれない」と。

「みんなの本当の優しさ」を目指し、微力ながらこの活動を続けていきたいと思えます。



◆ 川崎市教育委員会主催の「校長研修」で講演をさせていただきました ◆

1月29日(火)、川崎市教育委員会主催による『校長研修』が中原区の市民教育会館にて行われました。当日は川崎市立学校(小・中・高)の校長総勢166名が集まり、その前で当法人理事の篠原宏明・真紀が『遺族として 今 伝えるべきこと』を語りました。このような試みは全国的にも非常に稀であり、川崎市教委の本気度を内外に示すことになりました。以下、講演内容の抜粋を紹介いたします。

【遺族の実情】

私たちの次男である息子の真矢(まさや)は、2010年6月7日、「友達をいじめから護れなかった」と遺書を残し、自宅のトイレで硫化水素を発生させて、自らの命を絶ちました。息子は遺書の中に「俺は困っている人を助ける。人の役に立ち優しくする。それだけを目標に生きてきました」と遺しました。現在、私たちは息子のこの遺志を継ぐべく、夫婦で「ジェントルハート・プロジェクト」の理事として、お手伝いをさせて頂いております。

息子が亡くなったあと、川崎市教委が主導する調査委員会が発足し、息子の死の真相を究明した「調査報告書」が提示されたことにより、私たちは訴訟を起こさずに済みました。このことから、私たちは同じ遺族の間でよく「成功例」と言われます。子どもを亡くしておいて、「成功例」と言われることには違和感を覚えるのですが、延べ100人もの人に根気よく聞き取りをしてくださった市教委のお2人や、加害生徒に反省する機会を与えるべく被害届を作成した少年課の刑事さん。

さらに、適切な刑事罰を与えた家裁の裁判官。また当初から私たちに寄り添ってくださった保護者の皆さん。そして何より、亡き息子に代わって、一所懸命に証言してくれた息子の友人たち。これら全ての方々には救われたといっても過言ではありません。私たちが「成功例」と言われる背景には、この事件に関わった全ての人たちの、「正しい判断」と「正義」があったからなのです。しかし残念ながら、このように納得のいく事後処理をしていただいたご遺族は、実はほんのひと握りしかいないことを、私たちは後に知ることになります。あるご遺族は、関係者の隠蔽により、いじめそのものが無かったと言われ、またあるご遺族は「死因不明」の事件として処理されています。

事実、私たちがこれまでお会いしたご遺族は、事実を明らかにするために裁判を起こし戦い続けるか、全てを諦めて泣き寝入りするかの、どちらかの生き方をしている人たちだけしか居ませんでした。

【被害者責任論の怖さ】

いじめに対し、私たち大人の対応が間違えれ

ば、最悪の結果を招いてしまう危険があります。その誤った考えの代表的なものが「被害者責任論」です。「いじめられる子にも落ち度があるから、やられても仕方ない」という考えが、残念ながら今も根強く存在しています。しかし「いじめは、いじめる側が100%悪い」のであって、いじめられる子に責任はありません。たとえ人と違っても、いじめても良いという理由にはなりません。

息子が亡くなってすぐ、学校は生徒たちに「命の大切さ」を訴える講演を行いました。内容は、飼い主の勝手な都合で飼えなくなった犬が保健所に引き取られて、無残に殺処分されているというもので、講師は「生きてくても生きられない命があるのだから、君たちも命を大切にしましょう」と、大きな声で訴えていました。

この講演が始まった直後、話しの耐え切れなくなった息子の友人が途中で席を立ち、その場を抜け出してしまいました。彼を追いかけ話を聞いたところ「あれじゃ、結局は命を粗末にした真矢が全て悪いってことになる。真矢を追い詰めた加害者こそが悪いのに」と、泣きながら話してくれました。「命は大切」、「自殺はいけない」などという当たり前のことは、教えられなくても分かっています。命が大切だと声高に叫べば叫ぶほど、自ら命を絶った息子に対する非難が強まることを、彼は私に教えてくれました。今思えば、あのとき感じた違和感というもの、まさに「被害者責任論」だったのです。

いじめが原因で亡くなる子どもは、自ら好んで死を選んでいるものではありません。心をズタズタにされて死へと追い詰められるのです。あの時、本当に伝えなければならなかったのは、「悪意のある言葉や、暴力で人を攻撃すれば、相手を死に追い詰めてしまうことも有る」という危険な現実を、子どもたちに“考えさせること”ではなかったのでしょうか。

【子どもたちのSOSに耳を傾けて】

私たち大人は、「いじめられたら大人に相談しなさい」と子どもたちに言ってしまいます。この言葉も、言い換えれば「声を上げない被害者も悪い」という意味で、残酷な「被害者責任論」なの

です。子どもたちがなぜSOSを言えないか、私たち大人はもっと真剣に考える必要があります。

当たり前ですが、子どもたちは大好きな先生や、親、兄弟には、言い出しにくいものです。さらに、いじめに遭っている自分を弱い人間だと責め、そして被害に遭うことを、恥ずかしいことだと思っているのです。また、日頃から大人に相談できない子どもがSOSを訴えるとき、それは黄色信号ではなく、既に赤信号だと思ってください。子どもは、ギリギリまで自分の中で一所懸命に問題を解決しようと頑張ります。そして、その限界を感じたとき、初めて信頼できる大人に相談するものです。ということは、その時点では相当深刻な問題に発展している可能性があると考えなければなりません。もう一刻の猶予も無いのです。

【傍観者も加害者？】

私たちはよく「周りでいじめを黙って見ていた子も同罪だ」と子どもたちを責めてしまいます。

「傍観者も加害者だ」という理論です。果たして、本当にそうなのでしょうか？息子も3年生になってからは、加害生徒からいじめを受けることは、ほとんどありませんでした。でも、他の生徒たちに対して毎日繰り返されるいじめを目の当たりにして、彼らをどうしても許せないという気持ちが芽生えたのでしょうか。自分がいじめられていた過去がフラッシュバックしたのかもしれませんが。息子は自ら命を絶つことにより彼らを告発し、復讐をしたのです。当時の息子は渦中に居る当事者ではなく、周囲でいじめを目撃していた生徒の一人でした。これでも息子は「傍観者」と言われるのでしょうか？本当の「傍観者」というのは、たとえいじめに気付いても何の対応もできず、解決するスキルさえも持ち合わせていない、私たちのような無力な大人なのではないかと、私は思っています。皆さんは、自分の学校の生徒がまさか死ぬなどは、思っていないと思います。でも、それは今こうして遺族となってしまった、私たちも同じだったのです。

【いじめは“心”への暴力】

肉体への暴力は耐えられても、心への暴力に耐える術を、人は持ち合わせていません。まして、心は目に見えません。目の前の人がどのくらい傷ついているのか、他人には推し量れないものです。何気ない一言や行動が、相手を深く傷つけているかもしれません。いじめは「心」の問題です。みにくい心を持った子どもに育ててしまった、私たち大人にこそ大きな責任があります。き

ちんとした対策を打たないまま、いじめを放置した結果、これほどまでにいじめを蔓延させ、そして今もまだ、多くの子どもの命を救うことが出来ないでいます。この責任は、間違いなく私たち大人にあるのです。いじめは子どもの問題ではなく、私たち大人の問題だということに、全ての人が少しでも早く、気付いて欲しいと願ってやみません。

【学校は校長先生の意識で変わる】

学校は、校長先生の意識一つで変わります。子どもたちの目は、常に先生方を見ています。先生方の一挙手一投足に、子どもたちは大人の在るべき姿を学び、そして社会のルールや、人間としてのモラルを覚えていきます。常にその緊張感の中で子どもたちに接しているからこそ、教師という職業が「聖職」と呼ばれるのです。

皆さんは、教育者であると同時に、子どもたちの一番身近に居る、一人の大人でもあります。日ごろから子どもたちの見本となり、そして子どもたちの体と心の成長をサポートする、そんな存在であって欲しいと思っています。私たちは、子どもが居てこそ親をやらせてもらっているのであり、子どもが居てこそ「先生」と呼んでもらっているのですから。

【そして全ての大人へ】

「いじめを完全に無くすことは、無理かもしれないが・・・」などと、軽はずみな発言をするたび絶望の淵に追い詰められる、そんな多くの子どもたちが居ることを、どうか忘れないでください。私たち大人が「いじめは絶対に無くしてみせる」という強い信念を持たない限り、子どもたちはいったい誰に救いを求めれば良いのでしょうか。

この世に絶望し、そして亡くなっていった、天国にいる多くの子どもたちが「また生まれて来たい」と思えるような、そんな世界を作ることこそが、私たち大人に課せられた使命だと信じています。

息子から託された遺志を次に繋げていくことで、いつの日か次の世界で息子に会えたとき、笑顔で褒めてもらえるような、私たちもそんな活動を、これからも続けていきたいと思っています。



◆ 桜宮高校指導死がもたらしたもの ◆

理事 武田さち子

2012年12月23日、大阪市立桜宮高校バスケットボール部主将の男子生徒(高2・17歳)が、顧問の男性教師(47歳)から暴力を受けた翌日、自殺しました。

この事件をきっかけに、今回、様々な問題が提起されました。

◆ 体罰は過去の問題ではなかった

その一つは、体罰はけっして過去の問題ではなかったということです。

いじめ問題が大きく報じられるたびに、「今は体罰が許されないので、加害者への指導ができない」「少しでも生徒に手をあげたら、すぐに教育委員会に通報されて懲戒処分になる」「体罰禁止を子どもたちも知っていて、殴ってみろよと挑発するような子どももいる」などと言われてきました。

しかし現実には、体罰や暴力を伴った部活指導は当たり前のように学校生活に存在し、それを児童生徒やその保護者が申し立てるのは非常に難しく、校長など管理職が握りつぶしてしまうことが多いこと、教育委員会などに直接訴えて体罰が認められたとしてもほとんどが訓告処分など軽い処分済ませ、同じ教師が何度も繰り返しているということ、などが事件の周辺からわかってきたのではないのでしょうか。

◆ 暴力を容認する空気

そして、もう一つ。大人のなかに体罰を容認する空気が非常に根強いということも、今回、明らかになりました。「暴力を振るうのは、殴られる痛みを知らないからだ」「自分も過去に体罰をされたことがあるが、むしろ感謝している」という意見や、「部活を強くするには必要不可欠だ」という意見までもが噴出しました。

また、愛情さえあれば、体罰は許されるという意見も非常に多く出されました。これは特に、教師経験者からの意見が多かったのではないのでしょうか。

たくさんのいじめ自殺が報じられたあとでも、「いじめられる側にも原因がある」「いじめられることで強くなるのだから、大人は安易に介入すべきではない」という意見が、いまだに根強く支配していることに似ています。

ジェントルハートプロジェクトは、いじめを心と体への暴力であると捉えています。私は体罰も同じだと考えます。

文部科学省のいじめの定義「個々の行為が『いじめ』に当たるか否かの判断は、表面的・形式的に行うことなく、いじめられた児童生徒の立場に立って行うものとする。『いじめ』とは『当該児童生徒が、一定の人間関係のある者から、心理的・物理的な攻撃を受けたことにより、精神的な苦痛を感じているもの』とする。なお、起こった場所は学校の内外を問わない」では、いじめ

の加害者は児童生徒に限定していません。

そして、いじめがそうであるように、受けた児童生徒の立場に立って、それが適切な指導であるのか、暴力であるのかを、捉えるべきだと思います。

私たちは子どもたちに尋ねます。「そこに理由があれば、暴力を振るってもよいのでしょうか?」。大人たちは何と答えるのでしょうか。

◆ 指導死のとらえ方

「指導死」とは、「指導死」親の会のメンバーで、当法人理事でもある大貫隆志氏が、教師の指導によって死に追いつめられる子どもが少なからずいる現実を問題提起するために、作り出した言葉です。

体罰をきっかけとした自殺よりむしろ、有形暴力を伴わない生徒指導でも、子どもが死に追いつめられることがあると、多くのひとに知ってもらいたくて考え出した言葉ですが、皮肉なことに、今回の有形暴力を伴う部活指導による自殺をきっかけに、世間に「指導死」という言葉が広く行きわたりました。

理不尽な暴力を受けた子どもが自殺をするというのは世間的にも理解しやすい原因です。しかし、私が調べた1952年から2013年までの指導死68件(未遂5件を含む)中、有形暴力が確認されたのはわずか16件(24%)で、51件(75%)は有形暴力を伴っていませんでした(残り1件は不明)。

いじめで、有形暴力を伴ったり、恐喝などがなくても、言葉や態度だけでも死に追いつめられることがあるのと同じです。

また、暴力を伴った指導であっても、有形暴力よりむしろ教師の言動が児童生徒を死に追いつめたとみられる例が数多くありました。

今回の桜宮高校自殺事件でも、男子生徒は顧問の暴力的指導だけを苦にして自殺をしたわけではありませんでした。キャプテンというだけで、他の部員のミスまでも責任を負わされて叩かれることの不公平さ、キャプテンという役割と暴力を受けるということが一体化され、かつ、キャプテンを辞退すればレギュラーからも外されるという二者択一を迫られることの理不尽さに、自殺まで追いつめられたのではないのでしょうか。

そして、男子生徒は体育科の2年生でした。

部活を辞めることが学校を辞めることにつながったり、進路を閉ざしたりする場合、さらに逃げ場を失ってしまいます。まして2年生の12月。他の学校に編入して一からやり直すことも難しかったでしょう。未来への希望が断たれたとき、生きる希望も奪われます。

私たちは有形暴力の行使という見えやすい問題にばかりに目を奪われてしまうと、かえって本質を見失ってしまうのではないのでしょうか。

◆ 校長日記 ◆

NPO法人ジェントルハートプロジェクト 理事・事務局長 川崎市立富士見中学校 校長 青山正彦

富士見中学校に着任して2年が経とうとしています。今年学校では学年末を迎えて、3年生の進路についても月末には公立高校の合格発表があり、いよいよ3月の第64回卒業式に向けた準備が大詰めに来ています。

本校では、新入生202名を迎えた入学式を昨年4月5日に行い、新たな学習指導要領の実施となる2012年度が始まりました。

文部科学省では、平成20年3月28日に学校教育法施行規則の一部改正と中学校学習指導要領の改訂を行い、「脱ゆとり」教育の一層の推進が図られたと一般的には認識がされています。これに関連して内外教育に「正にそうです」と言える指摘がありました。

『脱』は、教育内容を減らしていく『ゆとり教育』から方向転換したという動きを指しているが、実はこの時点から『ゆとり』の時期にあたるのかが明確にせず言われていることがある。

学習指導要領の内容が減り始めた1980年代からを指しているのか、新しい学力観が導入された90年代からを指すのか、それとも、学校週5日制の完全実施に合わせて最も内容が減った2002年だけを言うのか。80年代からの『ゆとり教育』と考えるならば、「脱ゆとり」の指導要領は、まだ『ゆとり教育』から脱したことにはなり、5日制を続けているから、時間数は90年代並みに戻っただけになる。」どの業界にも、何とか「派とか、閥」が存在しますが、教育界にも、自身の影響力の拡大のみが第一の関心で、誤解や矛盾を承知で教育の振り子を揺らし続ける方々には私も心から失望をしています。

今回の改定に伴って、体育分野では武道とダンスの必修化もされましたが、報道などで大きく取り上げられたのは、武道の柔道でした。武道には、他に剣道や相撲もありますが、統計的に死亡事故の発生件数の多さからその注目度は当然なことだと思います。

ご承知の通り、武道は武術を起源にして、人を殺傷・制圧する技術の鍛錬に人格形成を加えたものです。柔道で言えば「直接相手と組合って攻防し、一本を奪取」する競技となります。競技の本質がここにありますから、どんなにいわゆる安全配慮を講じても、競技の本質上、「技を使って嫌がる相手から一本を取る」、制圧するわけですから、重篤な事故の発生率は高くなります。

柔道の競技性を否定するつもりなどはありませんが、安全に対する危惧に加えて、武道場の未整備状況、柔道着・防具の新たな費用負担など、どう考えても公立中学校は、武道学校ではありませんから、選択性で行うのが自然であると思っています。

義務教育課程の1教科の1分野の1領域の実施を図る上で、生徒の命を危険さらすリスクを冒し、安全配慮の時間と労力を教員がこれほどまでに費やして行う「必修」の必然は到底理解できません。

学校現場では、昨年はいじめ問題で大きく揺れ、今年になってからは体罰問題が揺るがしています。私にとって、体罰に関して驚くべきことは、首長や識者の中に、体罰という暴力を肯定的に認識している人が多いということです。

肯定的意見の中には、「場合によっては」とか、「事情による」やら様々ですが、「愛があれば」などに到っては、まるでDV容認の支離滅裂な論理です。

様々な業界にはその秩序を保つための独自のルールなどが存在していることは十分に承知していますが、法治国家である限り、マナーやルールの正当性がロー(Law)を超えることは決してありません。

暴力にすぎない体罰の有効性を説く教員がいるとするなら、指導についての誤認と指導力の欠如を自らが露呈をしていることとなります。極めて基本的なことですが、暴力は連鎖します。暴力には暴力での対抗となります。教育関係者は、体罰で押さえ込んだ教育現場の荒廃した姿から多くのことを学んで来たはずです。決して繰り返してはいけない過ちです。

「国を未来に導くのは、自ら学び自ら考える力を育む教育で育った子どもたち」、PISA調査の元締アンドレア・シュライヒャーOECD事務総長特別顧問のこのコメントは、特に義務教育を担っている我々は真摯に受け止めなければなりません。

とりわけ課題の多い教育行政と言われていますが、課題の解決には是非とも原因の十分な究明に基づいて行って貰いたい。より丁寧な対応としては、事実の確認、原因の究明、問題解決の検討・実行、そして、行ったことの点検・検証。

どこの組織でも普通に行われていることを省いて、ともすると聞こえてくる教育改革は問題の解決には結びつかない規制強化の色彩が強く残念です。

引き続きとなりますが、生徒も教職員もそれぞれの自己実現の達成に向けて、残りの期間について力を尽くして行きたいと思っています。



◆ 活動のご報告と今後の予定 ◆

日付	主催者	都道府県	都市	参加人数
2013/1/9	大田区立嶺町小学校	東京	大田区	210
2013/1/11	佐倉市教育委員会	千葉	佐倉	180
2013/1/15	佐倉市立染井野小学校	千葉	佐倉	350
2013/1/16	能美市立寺井中学校	石川	能美	450
2013/1/17	上尾市立大石南中学校	埼玉	上尾	400
2013/1/19	藤嶺学園藤沢中学校	神奈川	藤沢	150
2013/1/22	越谷市教育研究会	埼玉	越谷	45
2013/1/22	田辺市第二小・東陽中子どもサポート	和歌山	田辺	300
2013/1/24	栗東市立栗東西中学校	滋賀	栗東	700
2013/1/25	横浜市立大綱小学校	神奈川	横浜	350
2013/1/26	『性を語る会』	東京	世田谷	50
2013/1/27	保育士会勉強会	宮城	仙台	500
2013/1/29	緑区PTA連絡協議会	神奈川	横浜	480
2013/1/30	柏市議会教育民生委員会	千葉	柏	20
2013/1/31	船橋市立行田西小学校	千葉	船橋	200
2013/1/31	江東区人権推進課講座	東京	江東	30
2013/2/1	荒川区立ひぐらし小学校	東京	荒川	200
2013/2/1	川崎市立井田小学校	神奈川	川崎	170
2013/2/4	日本経営協会教員向け研修説明会	大阪	大阪	50
2013/2/5	日本経営協会教員向け研修説明会	岡山	岡山	50
2013/2/6	船橋市小学校・中学校教育研究協議会	千葉	船橋	70
2013/2/7	彦根市立東中学校	滋賀	彦根	360
2013/2/12	横浜市立小山台小学校	神奈川	横浜	230
2013/2/13	滋賀県立東大津高等学校	滋賀	大津	840
2013/2/15	瑞穂町立瑞穂中学校	東京	西多摩郡	170
2013/2/17	アミークスインターナショナル	沖縄	うるま	300
2013/2/19	横浜市立日野南小学校	神奈川	横浜	180
2013/2/19	足立区人権講演会	東京	足立区	350
2013/2/20	川崎市立野川中学校教員研修	神奈川	川崎	50
2013/2/20	横浜市立富士見台小学校	神奈川	横浜	100
2013/2/21	神奈川区人権研修	神奈川	横浜	100
2013/2/22	横浜市立もえぎ野小学校	神奈川	横浜	
2013/2/23	教育のつどい in 野田	千葉	野田	50
2013/2/25	川崎市立野川小学校	神奈川	川崎	320
2013/2/26	川根本町立中川根中学校	静岡	榛原郡	150

日付	主催者	都道府県	都市	参加人数
2013/3/11	清瀬市立清瀬第三中学校	東京	清瀬市	
2013/3/12	小田原市立前羽小学校	神奈川	小田原	40
2013/3/14	高島市立湖西中学校	滋賀	高島	300
2013/3/15	高崎市立長野郷中学校	群馬	高崎	350
2013/3/24	河内長野市東中学校区青少年健全育成会	大阪	河内長野	100
2013/4/6	滋賀県PTA代表者研修会	滋賀	近江八幡	800
2013/4/16	滋賀県教育 初任者研修	滋賀	大津	
2013/4/17	藤嶺学園藤沢中学校	神奈川	藤沢	
2013/4/18	宇都宮文星女子高等学校	栃木	宇都宮	
2013/4/23	岐阜県中津川市立第二中学校	岐阜	中津川	530
2013/4/24	滋賀県立野洲高等学校	滋賀	野洲	600
2013/4/25	横浜市立釜利谷中学校	神奈川	横浜	650
2013/5/15	大田区教育研究会教員研修	東京	大田	500
2013/5/28	滋賀県教委 10年経験者研修	滋賀	大津	
2013/6/3	独立行政法人 教員研修センター 指導者養成研修	広島	広島	80
2013/6/5	独立行政法人 教員研修センター 指導者養成研修	福岡	福岡	80
2013/6/5	幼・小・中 PTA指導者人権教育研修会	岡山	岡山	300
2013/6/7	郡山中学校	奈良	大和郡山	890
2013/6/13	幼・小・中 PTA指導者人権教育研修会	岡山	岡山	100
2013/6/18	幼・小・中 PTA指導者人権教育研修会	岡山	岡山	200
2013/6/23	NPO法人CAPいずみ	大阪	泉大津	100
2013/7/26	堺市人権教育研究会	大阪	堺	1,700
2013/8/1	合志市教職員研修	熊本	合志	400
2013/8/3	全国神社保育団体連合会	宮城	岩沼	100
2013/8/20	滋賀県教委 生徒指導担当教員研修	滋賀	大津	
2013/8/21	滋賀県教委 2年目研修	滋賀	大津	
2013/8/28	津市教育委員会教育研修会	三重	津	1,500
2013/10/26	読売文化フォーラム	富山	高岡	300
2013/10/27	読売文化フォーラム	石川		300
2013/10/31	鳥取県立岩美高等学校	鳥取	岩美郡	300
2013/12/14	南足柄市人権講演会	神奈川	南足柄	190

～ テレビ放送のお知らせ ～

- 当法人理事の篠原宏明・真紀夫妻がNHK Eテレの番組『青春リアル』に出演します。番組サイトを通していじめに苦しむ子どもたちと向き合う番組です。皆様是非ご覧ください。NHK Eテレ『青春リアル』いじめを止めたい！ 2月28日（木）午後11:30より放送
- 同じく Eテレで放送される道徳番組に当法人理事の小森美登里も出演します。NHK Eテレ『道徳ドキュメント～ (仮) 自分の言葉で考える』3月8日 午前9:45より放送



◇ 橋 が か か る ◇ ひととひととの出会い、そこにかかる橋

ここは毎回ジェントルハートプロジェクトに関わる方々の思いなどを自由にお書き頂くコーナーです。今回は石川県寺井中学校校長の谷口徹先生にお願いしました。

『小森美登里さん講演会』開催への思い

本校の2012年、1年生はまさに「中学生生活をスタートさせた年」、2年生は「後輩ができて先輩として自覚ある生活を目標にした年」、3年生、「寺井中学校の顔として活躍し、全校を引っ張り、次の目標をみざして努力した年」となりました。

寺井中学校は、どちらかという田舎町で地域のコミュニティがしっかりした地域にあり、生徒指導の問題は多くの場合地域の教育力に支えられて解決されます。しかし、約600人の生徒が生活をしていますから、残念ながら毎日のようにもめごとや喧嘩が起きます。もちろんいじめは他人事ではありません。

ただ、今年は研究校を引き受けたこともあって、外からたくさんの方々に来ていただいて、生徒の授業の様子を見ていただきました。たくさんの方々の保護者の方々、地域の方々、あるいは先生方にも来ていただいて、生徒が授業や、体育祭、文化祭等の学校行事で頑張る様子を見ていただきました。手前味噌ですが、授業の様子も行事の様子もとても立派で、3年生が手を挙げて生き生きと発表する様子に、日頃からどんなことも手を抜かず頑張っている寺井中学生が証明できたと思います。見ていただいた方々には生徒のことをたくさん誉めていただきました。生徒自身にとっても成長が実感でき、成果の大きい2012年だったのだと思います。当然、教師の指導やアドバイス、支援を素直に受けてこの成果を残してくれた訳ですから、これは、生徒の「素直な心」が成長を加速させてくれたのだということです。

ところで、次年度の生徒育成の目標を考えるにあたって、最近、私にとってなんとかしらないといけないと思っている課題が一つあります。それは本校生徒が持っている「やさしい心」、「友だちを大切に作る心」をもっともっと育てていかなければいけないということです。そんな心にあふれた寺井中学校を次年度に入学してくる新入生に見せたい、そんな風を学校全体に巻きおこしておきたい、ということです。そこで、昨年に引き続き1月に小森さんに来校いただきお話を聞かせていただきました。周りにいじめで苦しんでいる人はいないか？、友だちはみんな楽しい学校生活を送っているか？、寺井中学校は魅力的な学校か？、後輩に地域に誇れる学校か？そんなことを考える機会として、小森さんの話が生徒の「やさしさ」を引き出してくれる話としてぴったりだと思っていました。「心の教育講演会」と銘打ってお話を聞かせていただきました。

寺井中学校の生徒には、困難なことも根気強く話し合っって乗り越えていく力、たくましい心、やさしい心、友だちを大切に作る心を持って、生き生きと学校生活を送ってほしい。そんな教師の願いが届いたかのように生徒からは講演会の感想が出てきました。今回の「仕掛け」

=「講演会」は、生徒の「やさしい心」、「思いやる心」が耕され、成長にも大きな刺激になったと感じています。ありがとうございました。

今回の講演会を経て、保護者や生徒から新たにいじめの存在を知らせていただき、解決の取り組みがなされたりしています。生徒会が挨拶運動やいじめアンケートに取り組んだりしています。下の感想、生徒の心の成長に依拠しながら、いじめを早期に発見し早期対応に頑張ろうと考えています。やさしい心を育めるのはやさしい集団の中であることを信じて・・・。

【講演会での生徒の感想から】

◆今日のお話をきいて、改めて「心」というものを考えたり、いじめについて考え直したりすることができた。昔、自分もいじめの加害者になったことがあった。その時は友だちがやっていたからやっちゃっていた。実際のところはやっている間、いじめをしているという実感はまったくなかったけど、相手はいじめととらえていて、傷つけてしまっていた。自分もまた、いじめられていることもあった。今日のお話は、その昔のできごとに重なることが多くあり、考え直された。この講演会で聞いたことを、心に入れて、これから誰も傷つけることなく過ごしていきたい。

◆こんなに、大人から「みんな、生まれてきてくれてありがとう。」と言ってもらったのは初めてかもしれない、と思った。心から思ってくれている感じが嬉しかった。いじめは、直接人の体を傷つけたわけじゃなくても、死に追い詰めてしまうのだなと改めて思った。1日に2人も自殺する人がいるなんて驚いた。私は、全く知らなかったけれど、もし、知っていたら私に一体、何ができるのだろうと考えた。その場で何かできなかったとしたら、後で先生に伝えて解決できたらいいと思う。今日、この話を聞くことができてよかったと思う。私は小森さんの話を聞いて、泣いてしまった。このことを忘れずにいて、少しでもいじめが減っていったらいいと思った。そして、自殺する人が減ったらいいなと思った。これからは、相手の気持ちを考えて行動するように気をつけていこうと思う。

◆今日、小森さんのお話を聞いて、私はみんなから相談されたことを受け止められるスポンジみたいな人になろう、と思いました。今日、話を聞いて、いじめは人間として最悪な行動だと思いました。少しのいじめから始まったことでも、大きく大きくなっていくと、人を死にまで追いやる行動なので、本来は絶対あってはならないことです。だけど、私は1学年に1つはいじめがおきていると思います。なので、人をばかにしている人や人に暴力をふるっている人に、私は注意します。注意は小さな勇気があれば、誰にでもできることだと思います。